芥川賞小事典

芥川賞小事典

文藝春秋

〈芥川賞全集・別冊〉

芥川賞小事典

昭和五十八年七月一日　発行

非売品

編者　小田切進

発行者　西永達夫

発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―一二一一

本文印刷　理想社印刷所
扉印刷　凸版印刷
製本所　中島製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替え致します

Printed in Japan

芥川賞小事典　目次

I　芥川賞の半世紀
——その創設と歴史——……小田切　進……5

II　人と作品と時代

昭和十年代と芥川賞……久保田正文……54
戦後復興期の開花（昭和24—38年）……磯田光一……75
混沌に満ちた中間期（戦後文学から現代文学へ）……秋山　駿……97
六十年代の激動の〝後〟で……高橋英夫……124

III　芥川賞と直木賞（資料篇）

話の屑籠から……菊池　寛……148
二つの賞の間（純文學と大衆文學の問題）……永井龍男……156

芥川賞の生れるまで（対談）……永井龍男・佐佐木茂索……165
わが文学開眼（対談）……川口松太郎・石川達三……175

Ⅳ 芥川賞と私（エッセイ）

受賞といふハプニング……尾崎一雄……188
芥川賞受賞の頃……井上靖……190
時計紛失、あるいは幻の時計……堀田善衛……192
賞と運……松本清張……193
「先生」になつた頃……安岡章太郎……195
初めて候補になった頃……庄野潤三……197
その日前後……遠藤周作……199
煙りのような……開高健……202
新人の季節に登場……大江健三郎……204

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

やむを得ぬ第一作……北杜夫……204
あの頃のこと……三浦哲郎……205
私のナンバー……河野多恵子……207
挑戦の象徴・芥川賞……田辺聖子……209
私の運命を変えた芥川賞……池田満寿夫……211
ワープする芥川賞空間……尾辻克彦……213
芥川賞と私……吉行理恵……215

V

芥川賞年表……郡司勝義編……219
芥川賞銓衡委員任期一覧……268
あとがき……小田切進……269

題字　中田功
装丁　粟屋充

I

芥川賞の半世紀

――その創設と歴史――

小田切　進

芥川賞までの〈文学賞〉

〈文学賞の元祖〉といわれる芥川賞・直木賞が制定されたのは昭和十年（一九三五）である。途中しばらく中断はある（昭和二〇―二三）が、昭和五十九年には創設五十周年を迎える。わが国には数多くの文学賞があるが、その中で最も長い、半世紀にわたる歴史をもつ文学賞になったのである。

いったい日本にはどのくらいの文学賞があるだろうか。その中で芥川賞はどんな役割をはたしてきたか。しばしば〈芥川賞の魔力〉ということがいわれるが、そんな摩訶不思議な威力があるのか、どうか。功も大きいが、一方で罪ものこしてきていないか。芥川賞五十年の功罪を論じるとなると、先ずどうしてもその制定の由来をたずねておかなければなるまい。

初めに芥川・直木賞が〈文学賞の元祖〉といわれていると書いたが、この二つの賞より早くその前に文学賞に類するようなものが全くなかったわけではない。それでは芥川・直木賞の制定をみるまでに、わが

国にはどんな〈文学賞〉があったか。芥川・直木賞の制定は当然それまでの〈文学賞〉の歴史に深くかかわっているわけだから、まず簡単にそれまでの変遷をたどってみたい。

よく知られているように、文学賞は大別すると、芥川・直木賞のように、無名または新進作家のなかですぐれた独創的な作品を発表した者を選び、これを世に出すために制定された新人賞とも言うべき文学賞と、もう一つはその年度の傑出した文学作品におくられる殊勲賞、功労賞とも言うべき文学賞がある。新人賞には文芸賞、すばる文学賞、太宰治賞、岸田（国士）戯曲賞、江戸川乱歩賞、長谷川伸賞、その他文芸雑誌それぞれに新人賞の名を付した賞がある。後者には野間文芸賞、三大新潮賞のうちの日本文学大賞、毎日芸術賞、谷崎潤一郎賞などがあって、大家ないし中堅の作品におくられる。純然たる文学賞ではないが、朝日賞や、菊池寛賞中の文学者の授賞は、典型的な功労賞で、多年にわたる業績に対しておくられる。

文学賞は大別すると右の二種類に分けられるが、もう少し厳密に言えば、その中間に、すでに一家を成しているかどうかは問わずに、注目すべき業績を挙げた者に与えられる文学賞もある。各ジャンルごとに特筆にあたいする成果を発表した文学者を選んで授賞する読売文学賞などは、殊勲賞的な性格をもっているが、むしろ中間の賞になっているところに特色がある。右に述べた菊池寛賞はもともと功労賞として創設されたものだが、部門によっては無名または新進が選ばれることがある。

芥川・直木賞が制定される前、新人賞に類するものに新聞社や出版社の懸賞募集があった。懸賞募集は芥川・直木賞が大きな反響を呼んでから急速にすたれ、やがて影をひそめてしまうにいたるが、昭和の初めまでは才能ある新人を発掘する最も有力な方法として多くの新聞雑誌が大小さまざまな懸賞募集を行ない、多種多彩な新人を世に出した。

例えば高山樗牛のデビュー作となった中篇小説『瀧口入道』は、明治二十七年（一八九四）、『読売新聞』

の懸賞小説で第二位に当選（第一位はなし）し、同紙に連載されたものだった。樗牛は東京帝大入学直後の前年末、二十日ほどでこの小説を書き上げたという。連載が始まると、ロマンチックな悲恋物語が拍手喝采を受け、たちまち樗牛は流行児になった。賞品の金時計のかわりに、賞金五十円をもらったと言われる。ずっとくだって田村俊子の出世作となった中篇『あきらめ』は、明治四十三年（一九一〇）、『大阪朝日新聞』の懸賞に応じて書かれ、翌四十四年一月、一等に当選したものだった。この小説は女主人公の女子大生・荻生野富枝が新聞の懸賞に脚本が当選したものの、それがために大学から指弾され、以後目覚めた女として自立の苦しい闘いの道をあゆむというストーリーだった。

『大阪朝日新聞』は『読売新聞』に対抗して懸賞小説に力を入れ、明治三十七年に「創刊二十五周年記念」の懸賞長篇を募集していらい、田村の『あきらめ』を世に出した「一万号記念文芸」のあと、大正五年には沖野岩三郎『宿命』などを、同八年の四十周年記念では吉屋信子の『地の果まで』を、同十二年には一万五千号記念で番匠谷英一の『黎明』を当選作に選んでいる。ずっとくだって昭和三十八年には「朝日新聞一〇〇〇万円懸賞小説」を募集し、この懸賞で三浦綾子の『氷点』が選ばれたことは未だ記憶に生生しいところだ。

短篇の懸賞には『萬朝報』の懸賞小説があった。スケールこそ小さかったが、明治中期からユニークな一種の文学賞として広く知られていた。明治三十年、当時東京の新聞では発行部数十万部で第一位を誇っていた『萬朝報』は、森田思軒らを銓衡委員として週一回、賞金十円の懸賞短篇を募集することとし、いらい一時中断があったものの、大正十三年八月の第千七百二十回までつづけ、多くの新進作家を紹介した。当選した作家に中村春雨（明治三〇・三）、片上伸（同三一・七、八）、永井荷風、田口掬汀、国木田独歩（同三二・六―一二）、中村星湖（同三八・二―五）、広津和郎（同四二・七、八）（同四四・六―九）、荒畑寒村（同四三・七―九）、中川一政（同四五・七）、獅子文六（大正元・九―一一）、浜田広介（同二・三―六）、菊池寛（同二・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一一)、横光利一(同六・一〇)、大谷藤子(同九・五)、宇野千代(同九・九、一〇)、島木健作(同九・一二)らがいた。横光は白歩の名で、十九歳の年、『萬朝報』に短篇『犯罪』が入選していたことは広く知られているが、菊池寛も京都大学英文科選科に入学したばかりの大正二年十一月、菊池春之助の名で短篇『禁断の木の実』を書いて『萬朝報』の懸賞に応募し、入選していた(第九四九回)。芥川に誘われて第三次『新思潮』(大正三・二―九)の同人に加わる直前のことである。

それから二十二年後に創設された芥川賞の第一回は、菊池の強い推薦によって選ばれた『蒼氓』の石川達三だが、その石川も実は懸賞作家だったのである。芥川賞の第一回受賞者となる八年前の昭和二年、前記『大阪朝日』の懸賞短篇に『幸不幸』(のち『幸福』と改題)が入選して賞金二百円をもらっている。奇しくも菊池寛、石川達三ともに懸賞入選作家だったのである。

菊池は『半自叙伝』に、それまで投書や懸賞募集に応じなかったのに、「金が欲さに初めて投書したのが運よく当選した」と書いている。これに気をよくしてつづけて幾つもの懸賞に応募し、次々に賞金を獲得した。この時期のことが短篇『天の配剤』に描かれている。石川の『幸福』は早稲田の第二高等学院在学中の大正十五年、二週間ほどかけて書き上げ、『幸不幸』の題で送ったが反応がなく、学費も工面できなかったので大学をあきらめ、フィリッピンへ渡ろうと考えていたところだったという。入選して賞金二百円をもらい、英文科へ進んだ。この石川と同じ懸賞で川上喜久子、平林たい子らが当選した。平林の入選作『残品』は『嘲る』と改題されてやはり『大阪朝日』に発表され、平林は一躍プロレタリア文学の有力新人として認められて『文芸戦線』の同人に迎えられた。

そのほか『時事新報』の懸賞短篇で尾崎士郎が『獄中より』を書いて認められたり(大正一〇)、『改造』の懸賞評論で宮本顕治の『敗北の文学』と、小林秀雄の『様々なる意匠』が同時に出たり(昭和四)、千葉亀雄賞で井上靖が『流転』を書いてデビューしたり(同一一)するなど、懸賞からしばしば有力な新人が

現われている。

芥川賞が制定される昭和十年ころ、最も有力な懸賞小説は『改造』と『中央公論』の総合雑誌二誌が毎年行なっていた懸賞だった。とくに『改造』が創刊十周年を記念して昭和三年に創設した懸賞は、第一回に龍胆寺雄の『放浪時代』を一等に、保高徳蔵の『泥濘』を二等に選び、以後昭和十四年の第十回まで中村正常、明石鉄也、芹沢光治良、大江賢次、張（野口）赫宙、阪中正夫、荒木巍、大谷藤子、湯浅克衛らがここからデビューした。『改造』の懸賞が仮りになかったとしても、芹沢光治良ら右の新人たち、前記の小林秀雄、宮本顕治らはかならず何らかの場所で認められ、世に出たにちがいないが、受賞後にそれを超える作品がなく、消えてしまった者も少くない。しかし芥川賞より前のわが国の文学賞では『読売』『大阪朝日』などの懸賞とともに代表的なものとなっていた。昭和五年に「文壇アンデパンダン」を始めた『中央公論』は昭和九年、『改造』に対抗するためにアンデパンダンをやめ、懸賞小説の募集を『改造』を追う形で開始した。第一回に小山いと子の『深夜』などを、第二回に島木健作の『盲目』と丹羽文雄の『贅肉』などを、翌昭和十年の第三回に大鹿卓の『野蛮人』などを選んだ。『改造』の懸賞よりフレッシュな印象をあたえ、注目されたが、芥川賞の制定とほぼ同時に廃止された。『改造』も芥川賞の制定とともに精彩を全く欠いて、間もなく同十四年の第十回までで廃止された。

また更に懸賞より早く雑誌の投稿欄や投書雑誌のようなものがあったのを、文学賞の淵源と見るべきなのかもしれない。明治・大正だけでなく、昭和の作家でも、少年時代に、あるいは習作期に投稿し、入選作をのこしている者が少くない。最も早い明治十年創刊の『穎才新誌』、以下『少年園』（のちに『文庫』となる）『青年文』『新声』『秀才文壇』『文章世界』『文章倶楽部』『中央文学』などが代表的な投書雑誌だが、『新潮』の前身である明治二十九年創刊の『新声』なども、初期には雑誌の大部分が投書欄でしめられていた。投書雑誌は大正の終り近く、同人雑誌の時代が始まると急速にすたれた。

もう一つの功労賞、殊勲賞の性格をもつ文学賞も、明治中期に遡ることができる。瀬沼茂樹はその先蹤として、明治四十一年以降に『早稲田文学』が毎年、前年度の「其の成就する所最も大なりきと認むる各部面の文芸の士」を選んで掲げた「推讃之辞」を挙げている（「文学賞をめぐる諸問題」）。第一回は田山花袋の『蒲団』、ハムレットに扮した土肥春曙などが、明治四十二年の第二回は四十一年の作品から島崎藤村の『春』、正宗白鳥の『何処へ』などが選ばれた。賞金や記念品、授賞式などはいっさいなくて、ただ「謙虚の情を捧げ、推讃の意」を表するだけだったが、当時は『早稲田文学』が文壇の代表的な雑誌だったところから、権威あるものと見られた。そのあと永井荷風・小山内薫（明治四三）、徳田秋声・小川未明・谷崎潤一郎（明治四五）が選ばれた。第六回に該当者がないまま終った。

いわゆる大逆事件のあと、〈文芸の保護育成〉の名目のもとに、明治四十五年、文部省が文芸委員会を設置し、文芸功労者として坪内逍遥に賞牌と賞金二千二百円を授与した。この賞は一回だけで終ったが、のちの芸術院賞や文化功労者など官製の文芸賞の先蹤だった。

今日の文学賞とよく似たもので最も早いのは、大正十五年に制定された日本文芸家協会の渡辺賞である。この賞は北海道の実業家渡辺安治の遺志によって一万円の基金が協会に託され、前年に最も活躍した作家におくられるものとして発足、昭和二年の第一回に葉山嘉樹と岸田国士が、翌年は片岡鉄兵と室生犀星、北村小松三名が、第三回の四年は大佛次郎、十一谷義三郎、平林たい子三名が選ばれ、毎年計六百円の賞金がおくられた。昭和五年以降は五カ年に一回、賞金を三千円にすることに改められたが、その四回目の授賞が行なわれた形跡がなく、文芸家協会が編纂した当時の『文芸年鑑』にも、『日本文芸家協会五十年史』（昭和五四）にもその経緯は記載されていない。

昭和四年に制定された朝日文化賞はさまざまな領域で傑出した業績を挙げ、多年にわたって貢献した者

におくられる賞で、第一回に坪内逍遥が選ばれたあと、佐佐木信綱（昭和五）、島崎藤村（昭和一〇）とつづき、最近の大岡昇平、中野重治、野上彌生子、石川淳、中野好夫、司馬遼太郎まで多くの文学者が受賞した。『早稲田文学』の「推讃之辞」や、渡辺賞は結果的にはかなり新人賞の性格をもつものになったが、朝日文化賞は典型的な功労賞の性格を一貫して変えていない。戦前・戦中をへて今日までつづいている賞は、この賞と芥川・直木賞しかない。

こうして芥川・直木賞までの明治いらいの主要な文学賞をみてくると、この二つの賞はそもそもその制定から、それまでのものとは格段にちがうものだった、と言っていいだろう。

芥川賞の成功

このエッセイの結論から先に言ってしまえば、わたしは芥川・直木賞が数ある文学賞のなかで、とりわけ際立つものとなったのには、五つほどの理由があると思っている。その第一は『改造』『中央公論』のように懸賞とすることをやめ、大正末いらいの空前の同人雑誌時代に着目して、無名の新人を主として同人雑誌から発掘する銓衡方法を選んだ点にある。第二には芥川龍之介・直木三十五という菊池寛および文藝春秋にゆかりの深い文学者の名を付し、文藝春秋文学賞としなかったところに、成功の秘密がある。亡友を記念して二つの性格の賞を同時に制定するという趣旨が、少くとも一出版社の商業的な企画にとどまらない意義をもつものと、強く印象づけた点を見逃すことができないのである。もちろん芥川龍之介の名前が権威をもっていたことも、直木賞と二つの賞が助けあう関係をもっていた点をも忘れてはなるまい。

第三に、選ばれた銓衡委員の顔ぶれが堂々たるものだったからだ。それまでの文学賞、『改造』や『中央公論』の懸賞などには銓衡委員というものが置かれていない。もちろん相談相手や、顧問などが置かれてはいた筈だが、ほとんどが〈社内銓衡〉で審査を行なってきた。それが芥川・直木賞は、芥川・直木と

親交があったか、または二人を識る委員たちが選ばれて審査することになったから、これがそれまでの文学賞、新人賞と決定的にちがう印象を与えた。フレッシュだった。

第四に、その銓衡委員たちがお座なりの審査でなく、熱心に銓衡にあたった。亡友に対してもいい加減には出来なかったのだろう。初期には何度も度重ねて委員会を開き、議論をたたかわせて授賞者を選んだ。ずっと後になっても、伝統的に委員がいかに熱心に審査にあたったかは永井龍男の『回想の芥川・直木賞』（昭五四）その他で幾らでも挙げることができる。そして第一回から、その都度、経過をかなりくわしく公表してきたのも、しだいに信頼を受け、権威をもつものとなるのに、大きな作用をした。その後の多くの文学賞がこれに倣うようになったのは改めて言うまでもない。

第五に、受賞者の作家たちを、後々まで育てようと努めたことである。無名の新人の一作を選んだから、大成しなかった作家もなしとしなかったが、可能なかぎり受賞作家のバック・アップをしたようだ。自分の社で発掘した新人を大事に育てようとするのは、昔も今もどの社もすることで、当然すぎるほどのことなのだが、とりわけ文藝春秋社は芥川・直木賞で世に送りだした新人を大切にした。これがこの二つの賞を、やはり大きくした。言いかたをかえれば、この出版社は自社の文学賞を非常に大事にした、と言ってもいい。菊池寛と佐佐木茂索がいた。第一回から永井龍男が担当社員として世話を焼いた。そういうことの出来る出版社だったから、初めてそれが可能になったわけだが、それにしても創設の時から社の取りくみかたが、ひと味ちがっていた。いかにも力をそそいでいるという印象が強かった。

右の第一から第五の理由まで、五つの理由に順位はなく、どれもが重要で、その全部が関連しあって芥川賞と直木賞とが成りたった。菊池・佐佐木・永井らがつくった伝統は、後続の銓衡委員にも、新しい社員たちにも受け継がれ、たえず文壇に大きな問題を投げかけたり、マス・コミを揺るがす事件（？）をおこしたりしながら今日にいたった、と言うことができる。

この画期的な芥川・直木賞を創始したのは菊池寛である。昭和十年『文藝春秋』新年号は、次のような「芥川・直木賞宣言」を発表した。

芥川・直木賞宣言

一、故芥川龍之介、直木三十五両氏の名を記念する為茲に「芥川龍之介賞」並びに「直木三十五賞」を制定し、文運隆盛の一助に資することゝした。

一、右に要する賞金及び費用は文藝春秋社が之を負担する。

芥川・直木賞委員会

次いで二つの賞の「規定」と「細目」が掲げられていた。この歴史的ともいうべき記録は、永井の前に挙げた回想録や、瀬沼茂樹はじめ何人もの人たちの芥川賞関係の文章にもとりあげられているが、この『小事典』にはどうしても落すことの出来ないものなので、直木賞の部分を除く全文を採っておきたい。

芥川龍之介賞規定

一、芥川龍之介賞は個人賞にして広く各新聞雑誌（同人雑誌を含む）に発表されたる無名若しくは新進作家の創作中最も優秀なるものに呈す。

二、芥川龍之介賞は賞牌（時計）を以てし別に副賞として金五百円也を贈呈す。

三、芥川龍之介賞受賞者の審査は「芥川賞委員」之を行ふ。委員は故人と交誼あり且つ本社と関係深き左の人々を以て組織す。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com